

途上国における食料不安と肥満

解題／翻訳 三石誠司

解題	2
1. 途上国における強固な食料不安と肥満	7
コラム	17
2. 発展途上国における過体重と肥満： 食事、身体活動、社会経済的状況の問題？	19
概要	19
1. イントロダクション	19
2. 世界の肥満の状況	22
3. 発展途上国における社会経済的状態と肥満	25
4. 身体活動のレベルと肥満への影響： 発展途上国における現在のシナリオ	26
5. 実践の妥当性・関連性	28
6. 結論	30
参考文献	31

解題

三石 誠司
(宮城大学教授)

『のびゆく農業』第1028号は、2本の論文を翻訳したものである。

第1論文は、2008年9月に米国農務省の一般向け機関紙 *Amber Waves* に掲載された、農務省経済調査局のステイシー・ローゼンとシャーラ・シャプリーによる「途上国における強固な食料不安と肥満 (Obesity in the Midst of Unyielding Food Insecurity in Developing Countries)」である。

この論文において、著者は、「2007年時点においてほぼ10億人の人々が栄養不良の状態(食料不安)であると見積もられている」一方、「多くの発展途上国において、過体重と肥満の上昇率が急速に懸念」材料となっていることを指摘している。

この指摘で思い出すのは、わが国でも訳本が出版されているラジ・パテル(Raj Patel)の著書『肥満と飢餓 (Stuffed and Starved)』(邦訳は2010年)である。「なぜ世界で、10億人が飢え、10億人が肥満に苦しむのか?」という同書の帯に書かれたメッセージは世界中の人々に対し、現代のフード・システムが抱える課題の大きさをストレートに問いかけたものであり、記憶している人も多いのではないかと思う。

パテルの書の英語版が出たのは2007年である。*Amber Waves* にローゼンらの論稿が出たのはパテルよりも1年ほど遅いが、原論文は農務省の *Food Security Assessment, 2007 (July, 2008)* にも掲載されていることから、この時期、パテルが提起した問題は、政策当局にとっても無視できない重要な課題として突き付けられていたと推測できる。

現代のフード・システムの在り方については、一貫して批判的な視点を持つパテルに対し、米国農務省に所属するローゼンらの視点は、その立場を反映し、やや異なる。肥満と栄養不良という相反する状況の認識から、肥満に関連した疾病の増加、さらに対応のための政策オプションへと広がっており、具体的に

何ができるかがわかりやすく述べられている。

第2論文は、*The Scientific World Journal* の2014年号に掲載されたモーリシャス大学のトリシュニー・バーロージーとラジェッシュ・ジーウォンによる「発展途上国における過体重と肥満：食事、身体活動、社会経済的状況の問題? (Overweight and Obesity Epidemic in Developing Countries: A Problem with Diet, Physical Activity, or Socioeconomic Status?)」の翻訳である。

ローゼンらの第1論文を読んだ後、訳者は関係する各種論文をリサーチした。当初は、ローゼンらがコラムで紹介していた「シンガポールにおける肥満との戦い」であるTAF (Trim & Fit) の内容を精査し紹介しようとしたが、余り適切なものがなく、リサーチの切り口をやや変えたところ、バーロージーの論文を見出した次第である。

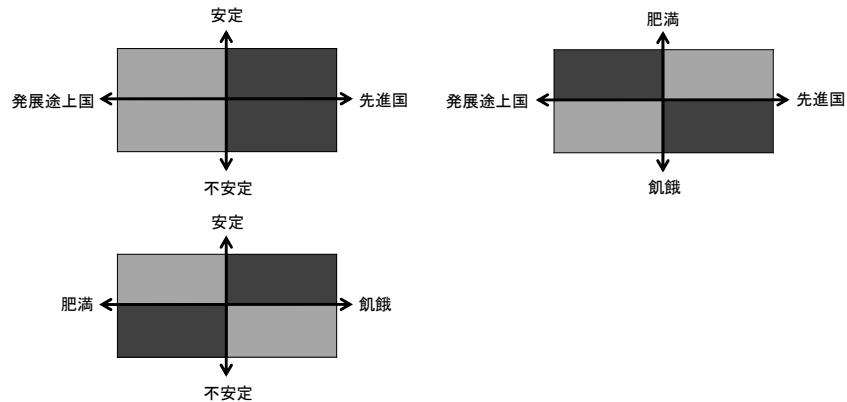
この論文は、2014年に出ているが、調査対象期間は1980~2008年と比較的長期であるだけでなく、発展途上国全体におけるBMIの傾向を比較している。総説 (Review Article) であるため、個別データについては各々の原典を当たり検証する必要があるが、少なくとも『のびゆく農業』が目的としている世界的な流れの把握という点であれば十分に要件を満たしていると考え、翻訳対象とした次第である。

詳細は翻訳本文を見て頂きたいが、バーロージーらは、「今後数年間で、より多くの先進国における最大平均BMIは、発展途上国に追い抜かれるかもしれない」という興味深い指摘をしている。その上で対応策として、「肥満状態の個人の環境から、より広い社会経済的 (socioeconomic contexts) をターゲットとすべき」という提言をしている。その背景は、モーリシャスで実際に過体重と肥満に直面している人々がどのような社会経済的状態にいるかという現場経験に基づいた観察が元となっている。

さて、以上の2論文からは非常に興味深い対称軸が見出される。

1つは、先進国と発展途上国という軸 (A) であり、もう1つは食料の安定

(security) と不安 (insecurity) という軸 (B) である。さらに第3の軸として、例えば、肥満と飢餓という軸 (C) が加わることになる。(A) (B) (C) の組み合わせは、3通りあるが、頭の体操として考えてみると、見落としがちな視点に気が付く。



各々の図において、色の薄い部分が従来の問題意識であり、色の濃い部分が新たな課題として注目されている部分と理解することができる。例えば、左上の図では従来、食料安全保障とは基本的に途上国の問題として考えられていたが、実は先進国においても重要な問題であり、その中身は、既に十分な食料を確保しており secure な状態にある先進国と、先進国とはいっても insecure な状態にある国があることがわかる。

実際、FAOにおける Food Security の定義では、availability, access, utilization, stability という4つの側面を重視しているが、これだけを見ていると、日本などはほとんど食料安全保障議論の対象外になる可能性すら否めない。このため、先進国における食料安全保障の在り方については、食料不安の状態にある多数の途上国を説得できる形での理論構築と、国際的かつ継続的なアピールが必要ではないかと考えられる。

また、肥満と飢餓の問題は、ステレオタイプの理解であれば、先進国の肥満と途上国の飢餓であるが、今回の2論文が指摘しているように、先進国における飢餓と途上国における肥満が急速に懸念材料となってきている。これが右上図の色の濃い部分である。

最後に、食料の安定と不安という軸と、肥満と飢餓という軸を組み合わせると、新たな課題として、食料が確保されているのに飢餓が生じるケースや、全体としての食料不安の中で肥満が生じるという状況が見て取れる。前者の典型例は流通や配分の問題であり、後者の例は、今回の2論文でも指摘されているように、高カロリー、加工食品への過度の依存や、社会経済的な生活環境の問題とも密接に関係している。そのため、今後の課題解決のためには、食品産業だけでなく、栄養学や公衆衛生学分野との連携による対応が不可欠になる可能性が高い。今後の研究分野の拡大が多いに期待できる領域でもある。

* * *

さて、環境変化が著しい現代社会において、『のびゆく農業』の対象領域をどこまで拡大するかは、実は大きな課題である。古典的・伝統的な意味における農業・農政と農産物貿易や食品産業などの関連領域だけに焦点を絞ったとしても数多くの未解決あるいは現在進行中の課題が見受けられる。中でも食料需給とそれに伴う食料安全保障 (food security) の問題は、人類の歴史とともに永遠のテーマであると言って良いかもしれない。

今回の2論文は、食料安全保障という問題が、生存に必要な食料の確保という次元から、何を確保して、どのように消費することこそが適切であり、個人だけでなくコミュニティの満足度の向上につながるかを浮き上がらせている。1996年の世界食料サミットにおいて、Right to Adequate Food という形で、食料安全保障の倫理的および人権に関する側面の議論がなされているが、あらためて農と食が持つ多面的意義を考えるきっかけにして頂ければ幸いである。